「スペイン滞在記」

井上　泰山

2005年はスペイン文学界にとって100年に一度の記念すべき年にあたる。

セルバンテスの名作『ドン・キホーテ』といえば、誰もが子供の頃に一度は耳にしたことがあるに違いない。騎士道物語を読み過ぎた結果ついに精神に異常をきたしたドン・キホーテが、妄想に取り憑かれ、世の騎士道を糾すべく、サンチョ・パンサを引き連れてヨーロッパ各地を渡り歩く、あの幻想的冒険譚である。『ドン・キホーテ』の初版が刊行されたのは1605年。ただちに一大反響を巻き起こし、以後国内で延々と版を重ね続け、スペイン最高の国民文学となっただけでなく、世界中の様々な言葉に翻訳されて今日に至り、今年めでたく400年目を迎えたというわけである。

400歳を迎えたセルバンテスとドン・キホーテは、今なおスペイン中で大活躍である。首都マドリッドはもちろんのこと、サラマンカ、バルセロナなど、各地の大手の書店には大抵『ドン・キホーテ』の専用コーナーが設けられ、豪華な装丁を施した各種の原本が新たな読者を待ち構えている他、マドリッド市内の国立図書館では、4月から9月までの半年間にわたって、初版本はもちろんの事、翻訳を含め、世界中で出版された『ドン・キホーテ』298点を展示していた。また、私が漢籍調査のために連日足を運んだ同図書館の閲覧室も「セルバンテスの部屋」と名付けられ、『ドン・キホーテ』関連の場面を描いた16枚の油絵が、周囲の壁から、遠路はるばる訪れた東洋の過客を静かに見守っていた。

8月初旬のある日、漢字との格闘に疲れた私は、セルバンテス生誕の地として名高いアルカラ・デ・エナーレスを訪れた。マドリッドの東北25キロの地点に位置するアルカラへは、アトーチャ駅から頻繁に電車が出ており、およそ30分で到着する。マドリッド市内から気軽に行き来できる距離にあるのが有り難い。

国立図書館前に立つ筆者

羽根ペンを持ったセルバンテスの銅像

アルカラ・デ・エナーレスは、高層ビルもなく、中世の面影を残す静かな田舎町といった風情ではあるが、1998年に世界文化遺産に登録されただけでなく、今年が世紀の年にあたるとあって、『ドン・キホーテ』関連の寸劇や講演会、野外音楽祭など、年間を通して様々なイベントが企画されており、街中がまさにセルバンテス一色に包まれていた。ただし、観光地にありがちな、客引き用の目障りな宣伝文句などは一切目に入らない点、いかにもスペインらしい大人の雰囲気を保っていて好感が持てる。

訪問当日の最高気温は40度。強い陽射しが照りつける中、セルバンテスの生家や、アルカラ大学を見学した。大学校内にあるパラニンフォ講堂は、スペイン語圏最高峰の文学賞「セルバンテス文学賞」の授与式が行われることで有名である。午後2時過ぎ、市民の憩いの場であるセルバンテス広場にも立ち寄った。中央には、右手に羽根ペンを握りしめたセルバンテスの銅像が颯爽とした姿で立っている。幾星霜を経てもなお色褪せることのない文学の世界。広場の一角にあるバルのカウンターに憩いながら、私は、ペンが生み出す力を改めてかみしめたことであった。

（平成17年度在外研究員・文学部教授）